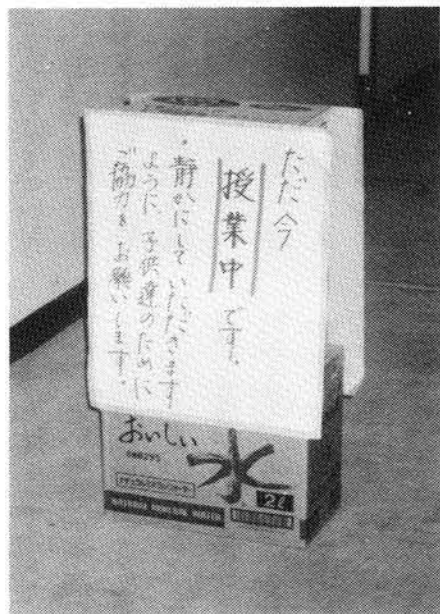


そして、 教育復興ボランティア…

学校は、避難所として指定されていた。しかし、学校は、避難所としての機能を何も備えられていなかった。教職員が頑張るしかない。日教組組合員への仲間としての連帯と、何よりも被災した方々への援助が必要であつた。

そして、日教組は「教育復興ボランティア」の派遣を決定した。当然、その主力は、私たち大阪教組が担わねばならない。大変なとりくみであつたが、得たものは大きかつた。以下は、ボランティアに参加した教職員の体験記である。





たったの一泊二日という短い期間ぼんやりしてはいけないというあせりでいっぱいでした。

八尾市教組
山本小分会 佐野 加奈

★ 震災を目の前にして

私は、兵庫県で生まれ育ったので、神戸を始めとする被災地域には思い出もあるし、自分と縁のある人も何人か暮らしています。そういう思い入れもあり、今回の震災に対しては、心穏やかでいられないものがあり、救援カンパはしたもののもしかしいっぱいでいた。

ボランティアに参加することになり、自分から何をすべきかつかめるか、とても不安でした。でも、とにかく行って精一杯体と頭を使って何かしてこうと思つて、西宮に向かいました。

行く前の打ち合せの時に、先にボランティアに行った人が撮影した写真を見せてもらったのですが、そこに写っている一階部分が倒壊した家屋の写真は、恐ろしいものがありました。テレビでは何度も見ているのですが、自分の暮らし

ている八尾が大きな被害を受けずにすんだせいか、身近に感じにくいところが心のどこかにあって、その写真を見て改めて震災の恐ろしさを感じました。

★ 何かしなくては…………

私の行った平木小学校は、西宮北口の駅から近かったのですが、線路沿いに歩いていくと倒壊しかかった家屋が所々にありました。その家々の間にマンションが見えたのですが、そのマンションが傾いています。五、六階立ての大きなマンションでしたが（あんな大きな建物まで）と驚きました。学校につく手前で何か黄土色の波のような模様が見えました。あれは何かな…………と一瞬わからなかつたんですが、それが一階部分は崩れ、模様のように見えたのが倒壊した文化住宅らしき建物の屋根と分かったとき地震の恐ろしさを改めて見せ付けられた思いがしました。

小学校に着き、受け付けをして前日から来た引継ぎをしたのですが、自分から仕事を見付けてしないと特別これといった仕事が無いと聞き、最初の不安がますます大

きくなってきました。たったの一泊二日という短い期間ぼんやりしてはいけないというあせりでいっぱいでした。そして、仕事を探さないと、しばらく、校舎、外をうろろしていました。一階の所に被災者のための衣料品がたくさんありました。とりあえず、これを整理して被災者の方が必要な服を探し易いようにしようと決め、服を畳み始めました。

★ おばあさんの話

何人かの方が服を探しにこられたのですが、そのうちに一人のおばあさんが寝巻になるような服がないか、私に尋ねてこられました。

一緒に服を探し始めると、お婆さんは服を探すよりも、被災にまつわる自分の身のうえ話をしてこられました。住んでいた学校の近くのアパートが倒壊して、数人の方が亡くなられたこと、今は娘さんの所に身を寄せているが、冷たい待遇をされているということ、その他、遠くにいる息子さんが、来るように言ってくれているが寒い地方なので、心臓の悪い自分は、冬の今はいけないことなど……。最後にこんな目に遭うんやったら、

死んだほうがましやと何度も言われるのです。被災者の方の心の内を思うとがんばれとかつてそれは違うとかではなくて、話を受け入れて少しでも聞くことでその人の心の支えになればと思い、一つ一つの話をつなずいて聞いていたのですが、「死んだほうがましや」の一言に「そんなことはありませんよ」と言わずにおれません。「さつき話されていた」息子さんが悲しまれますよ」としか返す言葉がありませんでした。

★ ボランティア活動

それから、昼からも服の整理をしていました。途中、妹と一緒に家族の服を探している男の子とも言葉を交わしました。その子がお母さんの服を探している時にまだ、「これどうかな」と勧める服があったのですが、お父さんの服をと言われたときに、勧められる服がありませんでした。男物の服がほとんど無いのです。何とか物資が集まっているように見えても、本当に被災者に必要なものは、なかなか揃っていないことを実感しました。

それから、トイレ用の水汲みを

ボランティア体験記

したり、五時から物資（食料）を配ったりという作業をしました。それから、ミーティングがあり、一段落つきました。そうして、自分たちが寝る場所にいき長期のボランティアに来ている学生さんとは話が少しできました。二人は、「二月の終わりまでずっといる予定でつてもなく、自分たちで色々問い合わせながら辿り着いたので、この平木小学校で………」という話をしてくれました。一人は風邪を引いていて、具合が悪いのにみんなに心配をかけまいとかなり無理をしていたようです。そんな姿をみながら長期のボランティアの人にも何か私たちが支援できることはないだろうかと考えました。

明日で終わってしまう。何となく様子もわかってきたので、明日は今日以上にしっかりやらんとあかん………と思つて眠りにつきました。そのせいか、夢の中で仕事をしていた電話がどうのこうのと言おうとしていて「電話………」まで言った自分の声で真夜中に目が醒めたぐらいです。

★ 信じられへん

二日目はトイレ掃除から始めました。そして、廊下掃除をして、外に物資を配りにいく仕事に出掛けました。倒壊した家屋の様子を来た日より目のあたりにしました。あまりのすさまじい被害に目を奪われて私は、そこで亡くなった人のことなど考えることがなかなかできませんでした。もし、自分がそこにいたら、と考えることの恐怖感でそこに暮らしていた人々、一人一人のことを考えることに押しつぶされてしまいそうな気がしました。でも、自分はたとえ目をそらすことが出来たとしても、実際にこの被害を受けた人は、この事実から逃れられないんだと当たり前のことを考えました。倒壊現場を目の前にしても、まだ信じられない思いが拭いきれませんでした。私ですら、この現実を受け入れがたい思いがあるのだから、ましてや被災した人達は、一瞬にしてこんな被害を受けるなんて、何を拠り所にしたらいいのか本当に苦しい状況におかれているのではないかと考えました。しかし、受け入れがたく思っている、恐怖感、私は私の想像の及ばないぐらい持

たれたのだろうか、あんな一瞬の天災が、どれほどの痛みを人々に与えたか推し量っても推し量りきれないものがあると今でも感じています。

★ 表札と同じ

外回りをしてるとき、特に印象に残ったことが二つありました。

一つは倒れかかった建物に貼ってあった小さな貼り紙でした。あちこちの家に避難先や安否を知らせる紙が貼ってあったのですが、その中で「故………告別式は………」と書いてあった紙がありました。

………と書いてあった紙がありました。その人の名は、その家の表札と同じ名字でした。きつとそこらの家の方がこの震災で亡くなられたのでしよう。その一枚の貼り紙には、一つ一つ壊れかかった人々に暮らしただけでなく、命まで奪ったことを今更ながらに知らされました。けれど、同時に生き残ったからよかったと手放して喜べるわけでもなく、助かった人の苦しみも同時に思い起こさせるものでした。

★ 次にできること

もう一つは、一階立ての長屋のような少し傾いていたのですが、

そこに一人のお婆さんが暮らして居られたことです。不安定な建物に一人で……。テレビがそんな人を取材していたけれども、実際にそういう人にお会いすると、被災者の中でも弱い立場の人のことを考えることがどれだけ大事か考えさせられました。

とにかく一泊二日では、何になつたのかあやしいものだと思いますが、今思うのは自分のできるところを、長期で考えることが大事ではないかということです。地震は一瞬でも、人々の苦しみは長く続くと思います。また、今は何とかしようという動きがあっても自分も含めて、この被災状況に対して何とかしようという気持ちがない日に薄くなってしまうのではないかと、という危機感があるような気がします。

次にできることは何か………これが私の今の課題です。

一番印象に残ったのは、生活物資をリヤカーに積んで学校の外の地域を回ったことです。

八尾市教組

上之島小分会 小桜 満香

★ 倒壊家屋

神戸は私の生まれたところであり、なじみの町です。友達もいました。いつもは心の片隅にしかなかった場所が、一月十七日の大地震の日から、心の大部分を占めるようになってきました。テレビに映る神戸の街を見るたびに涙がこみあげてきました。その日から「何かしたい」と思い続け、このボランティアに参加させてもらいました。

梅田から阪急電車に乗り、西宮へと近づくに連れて屋根に青いシートを被せている家が多く見えてきました。西宮北口の駅に着くと、その近くにある市場がぐちゃぐちゃに潰れていました。改めて地震のものがすごさを感じ知らされました。そして、私のクラスにマンションが壊れて芦屋から転校してきた子の話を思い出し、「どれくらい恐い思いをしたのだろう」と思わずにはいられませんでした。

目的地の平木小学校までの短い

道のりの間にも、潰れた家、傾いた文化住宅などがたくさん目に飛び込んできました。地震が起きる前にはいろんな暮らしや思い出があつたのだろうと思うと、今は、見る影もないその姿にやるせない思いが込み上げてきました。

★ 相当の苦勞

平木小学校についてボランティアの受け付けを済ませました。平木小学校は約四百人の人たちが避難しているとのこと。体育館、教室に入りきれないで、グラウンドにテントを張って住んでいる人もいました。水、ガスはまだ復旧していません。

地震から三週間以上経っていたので、ボランティアの仕事の内容などはだいぶ整ってきているようでした。それを作り上げるには、相当の苦勞があつただろうことは容易に想像ができました。実際に長期でがんばっているボランティアの人たちの姿をたくさん見ました。そして、何もない中でいろいろな人が集まって、一つの生活を作り上げていこうとするパワーみたいなものを感じました。

★ 「がんばってください」

私はトイレ掃除や、トイレを流すための水汲み、校舎内の掃除や、食料の配布などを手伝いました。

私がボランティア活動をした中で一番印象に残ったのは、生活物資をリヤカーに積んで学校の外の地域を回ったことです。そのボランティア活動の一つとして、学校の周りの人たちにも生活物資を配るといふのがありました。そこで、全壊した家の片付けをしている一人のおばさんにあるボランティアの人が声をかけると「ありがとう」といつて涙ぐんでいました。そのおばさんは一人暮らしだったようで、途方に暮れているという感じでした。私たちは物資を渡し「がんばってください」と声をかけましたが、そのおばさんのこれからを考えると胸がつまる思いでした。そして、自分の無力さを強く感じました。

★ 「何もできなかったな」

「何かしたい」と思つて一泊二日のボランティアに参加させてもらいましたが、「何もできなかったな」と言うのが実感です。避難しているおばさんに「ようやって

くれるね。ありがとう。あんたたちも休まなアカンよ」と声をかけてもらつて、本当に申し訳ない気持ちになりました。そして、避難している人たちのことを一生懸命考え、活動している長期のボランティアの人たちの姿に多くのことを学ばせてもらいました。この一泊二日の短いボランティア活動は私が地震に対して、どう向かい合つていくかを考えるきっかけになったと思います。考えてそして、自分が動くことの大切さを感じた一泊二日でした。

電車が進むにしたがつて倒壊した家屋が急激にふえていく。心が締めつけられるような風景だ。

守口市教組 小川 譲
第三中分会

ボランティアに行つた日は、9年2月24日（金）翌25日。朝、阪神梅田駅発御影駅行きに乗った。尼崎駅を過ぎたあたりから、ポツポツと屋根の上に青いビニールシートをのせた家が目に付く。香櫨園駅をすぎたあたりから電車は徐行を始めた。倒壊した家屋が急に眼につき始めた。自分は座席に座

ボランティア体験記

らずドア付近でその光景を見ていた。電車が進にしたがって倒壊した家屋が急激にふえていく。心が締めつけられるような風景だ。9時30分頃、御影駅につく。まず目についたのは、道路脇の花壇に乗り上げた車。タイヤが片方地面についていない。ぶつかったような跡もないし、地震の衝撃ではねあげられたのかも知れない。歩きながら見ていると電車で見た以上に、ほとんど家が壊されているという感じ。特に木造の家。鉄筋の建物なども例外ではない。30分ほど歩いて、目的地の西郷小学校に着いた。この避難所には23日現在、八百数十名の方が避難されている。既に、優先的に水道管が引かれ、給水作業をする必要はない。到着後、すぐに教室整備をした。モップで油ひき、机・椅子の数をそろえる。

食事後、阪神大石駅とその周辺を視察する。大石駅までの川沿いの道に露店が出ていた。威勢のいい掛け声がある。活気が感じられる。しかし、駅の高架を見ると、鉄筋がむき出しになった橋脚がある。崩壊。完全な破壊……。言葉で言い尽くせないほどの地震の強い力というか、想像を越えるエネルギーを感じた。これでは復旧は当分無理であるということが素直に納得させられてしまう。木造家屋は50%以上倒壊しているように思われる。火災もあったようだ。不気味に焼け焦げ傾いたマンションが印象的だ。ある倒壊した家。そのがれきの前に「ゴミを捨てないで」と板が置かれている。板のすぐ横には、たむけられた花と風に震える線香の灰。空しい。

ほとんどの家が、南北方向に揺さぶられ、瞬間的に一階部分が押し潰されている状態だ。二階部分が道路に飛び出しているという崩れ方をした建物も多い。大震災での死因が、一階で寝ていた人が下敷きになって圧死したというのがほとんどであるということがよくわかる。

夕方、ボランティアグループによる豚汁の炊き出しがあった。温かいものは貴重だ。ありがたい。この他にもいろんな形のボランティアの申し込みが続々とある。活動中、避難されている方に「どうもありがとう」とか「ごろうさん」とか声をかけてくれる。ボランティアに来て良かったと思える瞬間だ。

学校の教室や廊下は被災者の方がおられるので、本格的な授業はまだできない。今日は土曜日であるが、午前は低学年、午後は高学年の授業がある。やっと整備のできた教室で、来週から低学年は四時間目まで、高学年は五時間目まで授業ができるという。生徒の半数が転校してしまつてクラス数も半減、さびしいだろうな。体育の授業場所のグラウンドも半分以上、避難してきた駐車場になっている。のびのびと体を動かせる日はいつくるのだろうか。

仮設トイレの清掃にかかる。便器に大便がこびりついてなかなか取れない。水を十分かけておいてから他の便器にまわる。後からこするとすぐに落ちた。ところで言い遅れたが、西郷小は水が来ているので水洗トイレは使えるのだが、水量が少なく大便だけは外の仮設トイレで行うことになっている。

P M 3時00分ボランティアが終了して西郷小学校から国道2号線沿いを、ビデオを回しながら御影駅まで歩いた。詳細はビデオに写っているが、やはりここも建物の被害が大きい。破壊を免れているビルも少し傾き、隣のビルにあたっている。まるで、仲良く頬つべたを合わせているかのような光景だ。御影駅に近い所で元氣村なるものがあつてそこで音楽や踊りをやっていた。被災者を元気づけるためにボランティアが活動しているのだ。

今回の大震災のボランティアを通して、もつとも感銘を受けたのは、被害の大きさや被災されている人々の不便な避難所生活はもちろんだが、自然体で多数の人達が気負わず、あらゆる場所で、各自のできる方法でボランティア活動に参加していることだ。『助け合う』ということ、この当たり前のことが、毎日、あの日以来整然と行われている。何の報酬もなく、名誉も与えられず、縁の下の力持ちのごとく人知れず活躍している人達がいる。この現実を見たとき、自分も

また非力ではあったが一つの目的のために、何百カ所もの避難所で活躍するボランティアの人達と一体になったことの喜びが心にふつふつとわきあがってきた。

20日から、やっと授業が始まる
というので、たった二つの空き
教室のそうじも手伝いました。

大東教組
北条小分会 多田真理子

私が「ボランティアに行こうと思っただけで」と言った時、「僕も行きたい。」と言ってくれた子たちがいました。また、励ましの手紙を書いてくれたり、私の行く西郷小の友だちにと、お菓子をいっぱい持って行くと預けてくれた5・2の子どもたち、どうも有り難う。

2月19日(日) みんなの手紙と、お菓子を持って電車に乗りました。四条南小の矢代先生、永野小の梅田先生の三人で行きました。阪神電車の御影駅で降りて、そこから四十分行き歩いて行きました。途中、こわれた家や、道、駅など、たくさんあって思わず、歩く足をとめて、そこで苦しんだ方たちの

ことを思わずに入られませんでした。

西郷小では、日曜日だというのにたくさん先生達が職員室におられました。先ず、みんなの手紙とお菓子を渡して校舎内を見て歩きました。夜からの電話番号で、そこに住んでおられる被災者の方に、電話の取りつぎをしないといけないからです。どの教室にどの方が住んでおられるのかを知っておかないといけないのです。

西郷小には、千人以上もの被災者の方が生活しておられ、どの教室もいっぱいでした。体育館はもちろんのこと、ろう下や玄関にもふとんをしいて生活しておられました。その方たちは、教室の机やいすで自分の場所を囲って生活しておられました。

私達が行った19日(日)には、朝、やっと水道が復旧して水くみのお手伝いの仕事はもうあまりありませんでした。でも、砂の混じった水で飲み水にはできません。それでも、顔を洗ったり、トイレの流し水にしたり、そうじをしたりする水が出たということは、生活がとても楽になったのです。いちいちくみに行かなくてもいいの

です。でも、大便是、外の仮設トイレに行かなければならないし、夜はあかりもないし、やっぱり不便なのです。

私達は、ゴミ焼く炉でもやしたり、ゴミ袋をあけて、燃えるゴミや生ゴミ、燃えないゴミに分ける仕事をしました。でも、被災者の方たちも、不自由な生活の中、ちゃんと当番を決めて、自分たちで学校をきれいにしようとしておられました。トイレのそうじ当番も決めて自分達でやってもらいました。

19日は、おふろのある日ではありませんでしたが、校庭には大きなテントがあつて、その中に風呂おけが、三つほどあつて、そこへお湯を運んで入っておられるようでした。

夕ごはんのお弁当が届いた時には、小学校の5、6年生の子ども達がそれを配るのを手伝っていました。「これ、僕ができる」と言つて、自分達でやっていました。私達も手伝いましたが、子どもも大人に混じつて手伝っているのを見て、とってもえらいなあと思いました。自分にできる仕事を見つけて、自分から進んです。この

子たちは、そんなことをこの地震で学んだのでしょうか。

夜はたくさん電話がかかってきました。西郷小に知りあいの被災者の方がいるのか、名簿で調べて部屋まで伝言を伝えに行くのを私達がしたことです。中には、遠くから「こんな人はいませんか。」と尋ねて来られる方もいました。部屋まで案内すると、「いると聞いただけで、ここまで来た疲れもふつとんで体が軽くなった」と喜んでおられる方もいました。

明日(20日)から、やっと授業が始まるというので、たった二つの空き教室のそうじも手伝いました。

たった二つでどうやって授業ができるのでしょうか。子どもたちは集まるのでしょうか。学用品はあるのでしょうか？

でも、午後、授業再開に向けて学用品の救援物資がたくさん届きました。北条小のみんなが、児童会で集めている学用品が、こうやって現実に送られてきているのです。この中にみんなの送ってくれた物があるんだなあと思ひながらみんなで教室まで運びました。生き残った命を大切に、生き

ボランティア体験記

残ったことに感謝して亡くなった人たちの分までがんばりましょう。

20日(月)は、さんばつこのボランティア(美容師さん)の方が、10人来て下さいました。私達は、シャンプーのためのお湯をわかしたり、運んだりのお手伝いをしました。

そんな中、西郷小の子ども達がポツポツ運動場に集まって来ました。10人:20人:「えーこれだけ!」と思ったのですが、10時半頃には150人位(約410中)が集まりました。来れなかった友達もいっぱいいたのです。私たちが「おかえりなさい、がんばろうね。」の、ちよつとした看板のようなものを作って子どもたちを迎えました。

さんばつこの順番を待っているお母さんの一人が集まった子どもたちの姿を見て「胸があつくなるね」と言っていて涙ぐんでおられました。その言葉を聞くととても普通ではいられません。私も、胸があつくなっていました。亡くなった友達も七人いました。

西郷小の校長先生のお話が始まりました。「生き残ったことに感謝して、亡くなった人たちの分ま

でがんばりましょう。」「みなさんは、この一ヵ月苦しかったでしょう。したいこともできず、たくさんがまんしました。よくがまんしましたね。そのことを、ほめてあげたいと思います。」「この一ヵ月、つらかったでしょう、でも、そのことをがまんできたということを、バネにして、がんばって生きていきましょう。」と言われた時、涙をふいている西郷小の子どもたちの顔もありました。さんばつこの順番を待っているお母さんたちも、みんな泣いていました。

その後、学年に別れて担当の先生たちが、子ども達にいろいろお話をしておられました。

明日(21日)から、授業が始まります。と、言っても、低学年は午前、午後からは高学年の授業という二部制です。そして、学校の中には、被災者の方たちがたくさん生活していて、その中で授業なのです。

勉強といってもほとんど勉強らしいものではないでしょう。でも、西郷小の子どもたちは、みんなにはできない「命を大切に」という勉強を身をもってしていくことになるのです。

児童集会の最後に、6年生の北さんという子が「命を大切に」という作文を読みました。亡くなった友だちの分まで、私たちがしっかり生きていくという内容でした。お母さんたちががんばっている

職員室に二人の女の先生がいました。地震の直後からずっと学校の職員室に泊まっているということでした。でも、よく聞いてみると、先生じゃなくてPTAのお母さんたちでした。自分の子どもたちやお父さんは、親せきの家にそこいしてもらって地震直後から混乱している学校のために泊まりこみで、被災者の方や、学校の子どもたちや、先生たちのために努力しているお母さんたちでした。

とてもしっかりしていて、たくましく、何でもてきぱきとしてこなしておられました。

学校中のトイレに山積みになった汚物を、ゴム手ぶくろの無い中、素手に近い状態で取りのぞき、きれいに下さった話を聞かせて下さいました。

地しんの中、強く、たくましくなっていける被災者の方たちの姿を目の前にして、私たちは「生きる」ということにあまえている、

この被災者の方たちから学ばねばならないことがたくさんあるとあらためて考えました。

「あのね、うさぎさんのえさがないの。」「ぼくのめがねが、壊れないでみつかったの。」「

東大阪市教組 増田 俊昭
八戸ノ里東小分会

2月16日、西宮市立平木小学校、早朝の水汲みの時。薄いトレーナー1枚で、白い息を吐きながら、うさぎ小屋を覗き込んで一人の男の子がいた。

「何してるの」との問いかけに、「あのね、うさぎさんのえさが無いの。」と返ってきた。「だいじょうぶ。やっと学校が始まったからね。小学校のおにちゃんや、おねえちゃん達が、世話してくれてるよ。」

かずき君5才。避難所の体育館で生活している一人だった。

「あの日、ぼくはお母さんと寝ていたの。朝、暗い時にね、急にゴーっとなってね、ガラガラと音がして、下がぐらぐらしてね、たんとかが倒れてきたの。それから、ガタンと斜めになってね、天

井の電気がゆれてたの。お母さんが、『危ないから、横に。』って言ったの。うちの中にいるとね、外からどこかのおじさんが来てね。

ドアを開けてくれたの。でもちょっとしか開かなくてね、おじさんは、『子どもは、抱いて出せ。』って言ったの。僕は、細くなった所から抱っこしてもらって外に出たの。お母さんは、どこから出たのか分からない。ほくの家は、アパートの2階なんだけど、1階の家は、ぐしゃっと（両手でくの字を示しながら）こうなってる、階段が曲がって、すぐ横にあったの。……」

10分程だっただろうか、地震直後の、人によつては、もう2度と思い出したくないと言われる話をこの子は滔々と語ってくれた。

事実を克明に思い出し、ありのままにとらえることからこそ、深い思索と次の段階への足掛かりを得ることができる。話を聞きながら、ふと生活綴方運動から学んだそんな言葉が頭をかすめた。

「倒れてたテレビの下で、ほくのめがねが、壊れないでみつかったの。これでまた幼稚園で、絵本とか読めるからうれしいの。」

かずきくんは、昨夕配布されたパンとジュースの朝食をとり、体育館へかけだした。

水道は27日より復旧したもののガスがまだ出ていない為、校庭で火を焚いて湯を沸かす。

西部学校
事務センター分会 山口 修一

「人を教育するということは、一人ひとりに人生の困難を乗り越えるための土台をつくることです。とともに、人間が他の人と仲良く社会、地域の繁栄を考え、目指し、ともに暮らしていくために教育があるのです。」（ブラジルのアタイデ博士）被災地の学校で子ども達の元気な姿に接した時、今まさにそうした教育が自然のうちにに行われているという印象を受けた。

2月14日から1泊2日の日程で、西部学校事務センターの川又、木下、私の3名は、大阪教組の「教育復興ボランティア」として阪神大震災の避難所となっている学校の支援活動に参加させて頂いた。派遣先は、神戸市灘区にある摩耶小学校。JR住吉駅から阪急の御影駅まで15分ほど歩き、そこから

前日より折り返し運転が始まった電車で王子公園駅まで乗り、摩耶小は徒歩約10分のところ。

途中、所々に崩れた家々があり、現実に目の当たりにすると改めて地震の凄まじさを実感した。それでも、店の営業を再開しているところも多く、街は活気を取り戻しているように感じた。

10時半に現地到着。田村校長よりお話しを伺う。地震直後は約2千人が避難していたが、現在は千人よりも少なくなっている。授業は6日より、空き教室を利用して、午前・午後の2部に分けて再開しているとのこと。

そのあと、前日より来られていた天王寺夜間中分会の二人より引き継ぎを受け、3時まで共に活動。水道は先月27日より復旧したものの、ガスがまだ出ていない為、我々の昼間の仕事は、校庭で火を焚いて湯を沸かすこと。大きな釜2基で生活用、やかん4個で飲料用の湯を沸かし、住民の方がポットや湯たんぽ等を持ってきた時に熱湯を供給。燃料の薪は、周辺の倒壊家屋から出される腐材を一輪車で取りに行った。

時々トラックで救援物資が届き、

搬入の手伝いもした。この避難所では、住民の自治組織が出来ており、物資の配付は住民の方で行われる。援助物資の中には、インドからの粉ミルク、韓国の衣料品などもあり、国際的な救援活動に感動した。

夕方6時に釜の火を消し、8時より職員室でミーティング。灘区対策本部の中本氏の司会。先住民代表より、洗濯機の使用開始についての説明。福島医大から来ているボランティアの医師団より診療時間について連絡。学校長より、申し出を受けたボランティアの日程を紹介。脱衣所付き移動温水シャワー、大阪府中華料理組合などの炊き出し、マジックバルーンショーの企画、紙芝居、人形劇等々があった。灘区対策本部からは、家屋の倒壊状況の再調査、仮設住宅の申込み、義援金の代理受領についての説明。

夜10時より翌朝7時まで、3時間毎に三つの班に分かれて職員室で不審番。私は川又氏と二人で、10時から1時までを担当した。深夜2時、外部から従兄弟をたずねて来たという泥酔者が、2階の廊下でガラスを割るなど大暴れ。駆

ボランティア体験記

つけた警察官が6人がかりで取り押さえるという大騒ぎがあったようだが、私は熟睡しており後から聞かされた。

早朝6時より給湯の準備開始。

一方で住民の方が、長野県のボランティアから届けられた大根で炊き出しの準備を始め、川又、木下の2名もその手伝いに加わった。10時前に、次の西大阪支部のメンバーが到着。昼過ぎに日教組の佐野氏、大阪教組の土屋氏が来訪し、校長室で取材を受けた。

今回の活動の中で、多くのボランティアの方々と接する機会があった。自治労で愛知県から3泊4日で派遣されている二人の常滑市職員。休みを利用して活動している姫路の高校生。北九州市の職員も頑張っていた。このような大きな災害時には、行政の対応にも限界があると思う。それを支える大きな力がボランティアであることも実感した。

活動の合間に、灘区対策本部の方などから話を聞く機会があり、住民の自治組織、学校の教職員、区の対策本部の三者の役割分担について考えさせられた。また、近くの高校には暖房もあるのに、廊

下や体育館まで人が溢れている小学校へ避難民が集まっている。普段から住民との密接なつながりのある小学校が、こうした災害時に救援センターとしての役割を担わざるを得ない現実を、私たち教職員は重視するべきではないかと思う。

今回の活動は、私の人生にとって貴重な体験だった。仮設住宅の不足状況等から、摩耶小学校の救援活動は長期戦になるとのこと。今後も継続的な支援が必要だと思いつながり、午後3時過ぎに摩耶小を後にした。

なぜインフルエンザなどが流行っているようで、たくさんの方がマスクをしています。

市教組 宮崎 新吾
淡路中分会

2月6日朝9時30分に大阪教組を出発。谷九↓東梅田↓西宮↓今津↓青木と電車を乗り継ぎ青木から徒歩で避難所になっている福住小学校についたのが午後2時30分。かなりの時間がかかりました。職員室に入ると、学校の職員のかたが快くむかえてくれました。この

学校には地震直後600人の被災者が避難していたそうですが、今は250人ぐらいの人がまだ避難生活を送っていました。学校に着いてすぐにはなにをすればいいのかわからなかったのですが、他のボランティアの人達と話し合いながらやった主な仕事は、①物資の運搬・整理②衣類の配布③湯沸かし④食料の配布⑤校門や学校付近での生徒の登下校時の指導 なのです。

この学校では一応水と電気が使える状態だったので、トイレなどは水洗で十分に使えました。お湯をわかすのは職員室にあるガスコンロ6台フル回転しています。ガスボンベはいくらあってもたりないという状況です。食べ物はお弁当やおにぎり、インスタント食品などが、カップラーメンを食べるのにもお湯がいるし、「髪の毛を洗いたいので」といって洗面器でお湯をもらいに来る人などお湯は大変です。ガスコンロの他には、グラインドと給食調理室にプロパンのボンベがあり、これは朝のみそ汁や夜の炊き出しなどにつかっています。

衣類の配布などは、避難者全員に平等にいきたるようにコートならコートだけが250着（被災者全員）分がそろわないと配布できません。サイズもばらばらなので、もめることもあるようです。寒いのでコートの需要は高く、まだまだ足りないといった感じです。この日の夜は、大阪教組が用意してくれた寝袋で、給食調理員さんの控室で寝ました。

この日から福住小学校では授業が始まりました。午前中に低学年が10:30~11:30までの1時間、午後から高学年が13:30~14:30までのそれぞれ1時間だけ行われました。でもこの学校は校舎が改築の途中で地震にあったため、改築された校舎だけが残り、この校舎が避難所になっているために、授業は仮設の教室でやっています。子供達はそれぞれ大阪などに避難したりしているので、半分くらいの子が登校してきませんでした。学校のそばは救援物資を運ぶトラックなどが頻繁に通るので、ぼくたちボランティアは登下校の安全指導をしたりしました。

こどもたちが久しぶりに登校し、先生方もこどもとともに喜んでい

たようです。でも、授業はたった1時間しかできず、授業のあと、子供達も物資を運ぶのを手伝ってくれたりしていました。改築中の古い校舎は地震で倒壊したので、この校舎の工事はだいぶ先になりそうだと教頭先生がいつておられました。早く通常の授業ができるようにできればいいのにと願うばかりです。

テレビで見ると、実際目で見ると現場にはかなり違いがありました。被災者の人たちは、体育館や廊下などで生活をしていて、その不自由さはほんとに大変なものです。廊下には寝たきりのお年寄りがずつとねていました。とても寒そうでした。車イスに乗ったかたも何人か見かけましたが、障害者のボランティアがいなくて、ほとんど家族のかたが見ているというかんじでした。

保健室には医療ボランティアが待機していて、けがなどがあつたらみしてくれます。でも集団生活をしているので、かぜやインフルエンザなどが流行っているようで、たくさんの方がマスクをしています。理科室では散髪のボランティアがきていて、散髪をしてくれ

ます。いろんなボランティアがいるんだなあと思いました。

それと大変なのはゴミの山です。回収がおそくともう山のようです。でも他府県のゴミ回収車が応援にきているようでした。それにヘリコプターの騒音がすごくて、しゃべっていても聞こえないことがあるほどです。救援のためのヘリコプターだけではなく、たぶんマスコミ関係のヘリもかなり飛んでいたようです。

泊まり込みの学校の先生方は交替でやっているようですが、寝る時は職員室の床にそのまま寝ておられました。とても安心して寝られる状態ではありません。

駅から学校まで歩いて見たものは、倒壊して道路にくずれている家や、半倒壊した家、火災ですすだらけになっているビルなどで、ほんとうにテレビで見るよりもはるかにショッキングでした。自動販売機などは、売り切れている様子もなく使える状態でした。写真屋さんなどは、被災証明をとるために使ってくださいと、カメラの無料貸し出しをしていて、写真は1枚1円で現像してくれるところもあります。

学校は王子公園のそばにあるのですが、王子公園自体が、自衛隊のキャンプになっていました。

5年前も地元島原の普源岳の噴火の際に避難した友人が何人かいて、その時と同じような状況だったので、被災者の生活が苦しくなるのはこれからだと思います。また兵庫や神戸といえば、自分の田舎にくらべれば大都会なので復興にも時間がかかるだろうなと思います。暖房のない学校の施設での生活には限界があります。ノイロ1ゼになってもおかしくない状況だからです。はやく仮設住宅などで生活できるようにと願いました。

ボランティア活動を終えて感じたことは、1泊2日だけでは力になれないし、時間をかけて来た意味がないということです。またボランティア活動ももっと早期に行ったほうが被災者や学校の職員の方も助かるしもっと力になれたと思います。また障害者のボランティアやお年寄りへのボランティアなど、いろんな意味でのボランティアがこれからは必要になってくると思います。とにかく貴重な体験をさせてもらいました。

二カ月すぎた現地でしたが、すべてに大変さがひしひしと感じられた2日間でした。

南河内教組 高橋 勝代
楠小分会

3/22、23 西宮市立用海小学校に行きました。

前日からの泉南ブロック4名と午後3:00に引き継ぎをし、さっそく指示通り動くことになりました。100食近く夕食の野菜の切り込みから始めました。前日から少しずつ水が出ているので、うまく利用して(約1ヶ月以上水が出なかった)ので、塩分をたくさんふくんでいるので荒洗いのみしか使えなく(最終しあげはおき水をかけての準備で普通の倍の時間がかかり手もひどくあれました。でも水が出たことよろこびは、みなひとしおでした。トイレの水(昨日まではプールからくみとる作業が続いたとのこと、御苦労が続いただろう...)と思います。ボランティアの人は北海道、福岡、愛知と7名が、責任者の坂本さん(被害にあわれた方)の指示に従い動いていました。坂本さんも超

ボランティア体験記

いそがしい方で、7kgやせたと云った言葉も心配です。トイレ清掃、次の日の夕食の準備等をしおえ、堺の方に引き継ぎしました。その後、御影、芦屋と被災の現地をたずねてみました。一ヶ月すぎた現地でしたが、すべてに大変さがひしひしと感じられた2日間でした。

風呂やトイレはもちろんのこと
朝起きて顔を洗うのも不便でした。

南河内教組 羽山 彰
藤井寺中分会

西宮市立用海小学校に2月6日～7日の1泊2日、ボランティア活動をしてきました。体育館に避難されている方々は、比較的明るい表情で会話されていましたが、ガスや水道が不通で、風呂やトイレはもちろんの事、朝起きて顔を洗うのも不便でした。壁のない大きな部屋で100人以上の人が共同生活をしていられるのは、もうそろそろ限界に近づいているためか、小さいいめ事が発生しやすい状況です。1日も早く、元の生活にもどれることを願っています。

当たり前前に三食を食べれるのは
いつだろうと、険しい気持ちになりました。

市教組 木原 淑江
新北野中分会

避難所の朝は早いです。(お年寄りが多いことありますが、暖房のない冷え込みの中で、ぐっすり眠れるものではありません。朝五時、当番の人が協力してトイレなどの掃除が始まります。7時ごろ給水車が到着。放送があると、容器を持つてならびます。水道は出ますが、まだ飲めないそうです。そのあと朝食の配給です。食事係が並び、各部屋の(各班の)人数を告げ、ADRAからパンと牛乳を受け取ります。クリームパン・食パン三枚・ジャム・牛乳でした。体育館で一一緒に食べました。昼間、仕事や家の後始末や家探し、病院への見舞いなどに出かける人が多く、朝食時はちよっとしたにぎやかな団らんです。この朝は天気がよく、「毛布をほししましょう」と放送が入ります。私たちが各部屋を回り、動きづらい人の毛布はかわりに運びます。

昼食は、近くの公園で京都からの団体が炊き出しをすると言うので助かりました。温かいカレーうどんです。動きにくい人の食事を運んで帰って配ります。温かい食事はど元氣の出るものではありません。

夕食は、サンドイッチ(たまに弁当)の配給と汁もののプロパンガスでの炊き出しです。手伝ってくれる人を募りながら、子供たちもまじえて、忙しい3時間作業。できあがったその日のみそ汁は、大根・人参・白菜・豆腐と、栄養満点でした。大根は、葉っぱも刻んでいれました。通りすがりの人近所の人も並びます。当たり前前に三食を食べれるのはいつだろうと、険しい気持ちになりました。

ちょうど10日から、すごいことに簡易シャワーがADRAによって設置され、使用が始まりました。ただお年寄りには不便です。近くの銭湯は、2時間待ちで20分の入浴だとか。一度もお風呂に入っていない方もあります。なんとかならないでしょうか。

物資はなんとか届いているようです。この日は石鹸・衣類・食料が届きました。ただしあまっています。

る食料(お菓子・野菜)は返品していました。無駄になってはいけなないので、その時々に必要なものを送るシステムが必要です。

玄関には図書館からの貸し出しの本がダンボールに入れて並べてありました。とてもいいですね。いつも誰かがその本をいろいろと見ては借りていっていました。新北野の先生からいただいた絵本も横に並べました。子供連れのお母さん達がさっそく何冊か持ち帰られ、また体育館のふとんの上で寝転がってみている子供もいました。

学校の授業のほうは、午前に低学年・午後に高学年と分け、1時間ずつ再開しています。幸いプレハブ校舎があり、子供たちはそこに登校します。避難所の教室から登校する子もいます。転校した生徒は、子供の話では「あまりいてない。クラスで一人とか……」ということでした。

小学生以下の小さい子供は10人もいるかどうかでした。持っていたたらくがき帳やクレパスを渡して一緒に遊んだりしました。お母さんに聞くと、「はよ帰ろう!」とごねることがあつて困るとか。

ボランティア体験記

大人も同じ……。つらい言葉です。

お年寄りの方に、新北野の生徒（1年）の書いた手紙をお渡ししました。15通程でしたが、一人一人お話しながら手渡しました。言葉すくなく黙っている方もいらつしゃいました。受け取ってくださいました。また、読む前から「気持ちだけで本当にうれしい」と涙ぐまれたり、あとで「返事かきたいけど字が汚いし、うまくかかれん。ほんまにありがとうて言う」といって「いう方もありました。見ず知らずであっても、気持ちだけで支えになれる、何でもできるんだと、あらためて感じました。声がけしてくださった担任の先生方、ありがとうございました。

今回の活動を終えて帰ると、大阪の駅から「日常」に戻っています。まっすぐな建物や、人々のにぎわい、軽い会話が、なんだか信じがたい感覚になります。おそらく被災地から通勤されている先生・休みのたびに自宅の片づけに戻る転入生も、似たような違和感をもちながらの日々ではないでしょう。なんとかその気持ちを受けとめ、共に悩んでいける仲間であり

たいと考えます。

さて、被災者の不自由な生活は、長期にわたる模様です。地震後四週間目をむかえ、気力も健康面も気をつけなければなりません。支援する側が、息長く確かな援助をしなければ、自立までの見通しが立ちません。

福田小学校では、昼食用の温かいカップめんと、寝るときに身に付けるカイロが、底をついてきているそうです。

西宮に続く第二弾として、カップめんとカイロを送り、すぐ役立ててもらってはどうか。必要などころに必要なものを確かに届けることが、確実な支えになると考えます。

息長く 援助し、
なんとか力になりましょう。

夜は町全体がゴースタウンになる。女性の先生はできるだけ早く帰ってもらうように……

市教組
生江小分會 渡辺 祥生

◎尼崎を過ぎる頃から風景が一変
◎JR「住吉」から阪急「御影」へ徒歩15分、空気がうっすらとゴ

ムくさく、ほこりっぽい。歩いて見ると地われ、家屋の倒壊のすごさがよくわかる。道の腐材はほとんど整備が進む。

◎新築3年目の冷暖房完備の稗田小だが、正門からいたるところ、ボランティア、住宅、求人案内、たき出しなどのビラが貼られ、全館ほこりっぽい。校舎のあちこちに深いき裂が走る。

◎2月22日現在1088人が生活とのこと。しかし、出入が激しく、正確な実数はつかめていない。初期の住民同士、住民と学校のトラブルも少なくなり、落着いてきたとのこと。

◎1000人以上の生活だが、互いに隣を気づかってか、昼も夜も妙に静か。3つの部屋での二部授業 午前10:00~11:30、午後1:00~2:30、その間の子ども遊ぶ声だけが明るい。

◎老人がほとんどだったが、家族、若い人もけっこう多い。野外のビニール・テントの生活者も多く、階段、廊下などで毛布にくるまっている人たちの寒さが気になる。足・腰の悪い人たちの階段の、のぼり降りも大変。

◎教職員のどの顔も疲れがにじむ。

きもつ玉母さんのような女教頭も、人に会うのもつらい、精神的にダウンと、顔もゆがむ。

授業再開も名ばかり、住民への対応7~8割、子どもへの対応2割。◎手づかずの物資が山積み。子どもへの物資もダンボールに入れられたまま。

「物ばかり子どもたちに与えても……もう少し、正常に学校が動き出し、住民も、自分の生活がとり戻せないと、個々人は物資の置き場ありませんから……」布団をひいた広さが、個々人の空間。

◎教職員の半数も被災、しかし、学校へ来て働く方が気がまぎれるのか、全員出勤。早い出勤の人は6:00、遅い人は午後10:00~11:00。宿直もおられ、順次交代。夜は町全体がゴースタウンになる。女性の先生はできるだけ早く帰ってもらうようにしているが、男性の先生が少なくて困っています。大阪の支援が唯一の救いのこと。

「3月5日でボランティアは終わりですか、大阪も学校がありますからね……」と心配そうに教頭先生が聞かれる。